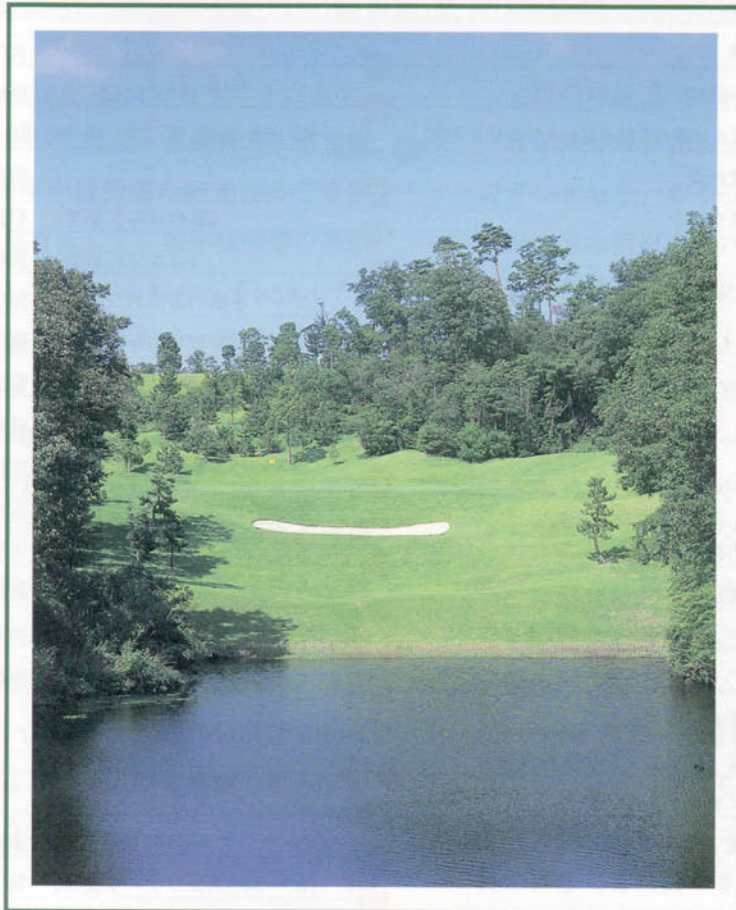


THE  
**Olympic Golf Club**



**JANUARY 2004 VOL. 9**

# ゴルフ界の重鎮が見たオリンピックGC

出席者 加藤俊輔・田野辺薫  
大川 清  
聞き手 五嶋雅徳・川島好彦

日本ゴルフコース設計者協会の初代理事長で国内外に多数のコースを設計された加藤俊輔さんと、一時代を作ったゴルフ雑誌「週刊アサヒゴルフ」の編集長だった田野辺薫さんをゲストに迎えた。座談会の直前、お二人は大川会長の案内でコースを視察した。日本のゴルフを鋭く見つめて来られたお二人の眼に、オリンピックゴルフ倶楽部はどう映ったか？ 厳しくも優しい評価が下った。

## まずはご紹介から

五嶋 「会員のほとんどがお二人のお名前を知っていると思うんですが、中には最近入会された若い方もおられるので、業績をご披露の方々、質問をさせていただこうと思います」

加藤 「はい」

田野辺 「どうぞ」

五嶋 「加藤さんは、昔ゼネコンにいらして、ゴルフコースの設計をされたということですか？」

加藤 「ええ。でもゼネコン時代は今のようになるとは夢にも思っていませんでした。日本のゴルフ場はこれでいいのかなと思いつつ作っていました。外国へ出たときに仕事を放り出してゴルフしていたのが役に立ちました（笑）」

五嶋 「じゃ、若いころからゴルフやっておられた」

加藤 「昭和28年ごろからです」

五嶋 「全国に70か80のゴルフ場を設計されてるとか？」

加藤 「国の内外で、80近いですね」

五嶋 「関西では？」

加藤 「うーん、どこのエリアから言えばいいのかな」

五嶋 「東条カントリーもそうですね？」



加藤 「ええ、ま、自分でやったコースを忘れちゃ申し訳ないけど…」

五嶋 「例のタイガーウッズが来た太平洋クラブ御殿場コースは素晴らしいコースですね」

加藤 「2001年の世界選手権（ワールドカップ）ですね」

五嶋 「こういういい方はよくないんですが、代表作みたいなものはあるんですか？」

加藤 「よくそう聞かれるんですけど。私は加藤俊輔のデザインというのを持っていてそれをどこへでも当てはめるというタイプじゃないですから」

五嶋 「はあ」

加藤 「自然にはいろんな色がありますね。デザインもいろんな色にしているんです。平地とか草原とか大別して4、5色あると思うんです。そういうところに合うようなデザインをやっています。好きなのは何ですかと言われれば、あるんですけど、いいか悪いかは別の問題で。御殿場コース（太平洋）は一般のゴルファーが何となく、まあ一般的にいいと言うことで人気が出るんじゃないですか。私の中でNO.1じゃないです」

五嶋 「はい。ではあとでオリンピックの感想などをお聞きします。田野辺さんは、『週刊アサヒゴルフ』にいらしたそうで？」

田野辺 「創刊からずっと編集長でした」

五嶋 「いつが創刊ですか？」

田野辺 「昭和46年です」

五嶋 「私、ゴルフを始めたのがちょうどそのころで、ずいぶん『週刊アサヒゴルフ』の恩恵を受けました。今は『ゴルフスタ』という雑誌を発行されてるわけですね」

田野辺 「半分道楽みたいなもので」

五嶋 「これを読んでいたらレッスンのコーナーがないんですね」

田野辺 「レッスンとトーナメントのページはないんです」

五嶋 「そういう編集方針なんですか」

田野辺 「いや、そうじゃなくて一人でやっていますから限界がある。ほかに大きい媒体がありますから、レッスンや競技はそっちに任せて」

五嶋 「僕は雑誌のレッスンコーナーというのを読み過ぎて、全然うまくならない。会長にい



加藤俊輔氏



田野辺 薫氏

つも怒られてます (笑い)

**田野辺** 『『週刊アサヒゴルフ』の前に、昭和35年から『週刊ゴルフ』という大判の新聞がありました。『ゴルフダイジェスト』もそうですが自動車関係の出版社でした。オーナードライバーが即ゴルファーの時代なんです。そこからゴルフ記者を始めたんです。『週刊アサヒゴルフ』の頃はゴルフ週刊誌がものすごく売れた時代でした。当時はレッスンの本というのはなくて雑誌のレッスンで読んでいた]

**五 嶋** 「そうですか。この雑誌を読みましてびっくりしたのは、我々が作った会報を田野辺さんが批評されてるんですね。30行もない文ですが、実に慧眼というか厳しいご指摘をされています。」

**川 島** 「そうなんです。当初から田野辺さんには会報について、相談したり、アドバイスをいただいたりしていました。」

**五 嶋** 「ほうほう、だから今日はどういう座談会にしようかと (笑い)。そこで、お二人にゴルフの真のあり方、ゴルフ場の正しい姿というんですか、プレーされる方のマナーなどをわれわれオリムピックのメンバーにご意見を賜れば、そういう座談会にしたいと思うんですが、会長いかがですか?」

**大 川** 「ええ、いいですね」

## 記憶に残るコース

**五 嶋** 「じゃ、まず加藤さん。デザイナーの考えとプレイヤーの考えが競争するという話がありますが、今回、オリムピックを回った感想から…」

**加 藤** 「名前は前から存じ上げていた。行ってみたいと思っていたコースです。このエリアは土質の悪いところで、地形も決していいところではありませんのでいいコースが作りにくいところだったんです。だからどこかにそういう欠点があると思ってました。会長にご案内していただいて全ホール見ましたが、本人がおられるからおだてるんじゃないんですが、見た目より遥かにポリシーがあって作られているということがよく分

かります」

**五 嶋** 「ほう」

**加 藤** 「それは何かというと、自然からもらったものは自然に返すというのが設計のぼくのポリシーなんです。それと同じことを会長が言われました。あんまり奇を衒ったデザインにしたり人工的な飾り立てをしたりしなかった、と。いいコースの条件というのは、いくつかあるんですけど、世界の名コースというのはみんなメモラビリティーといえますか、ホールに特長があって記憶に残る。分かりやすくいうと18ホール歩いて、どのくらいのホールを覚えてますか、ということです。それと良好な豊かな自然で構成するのが理想で、そういう意味から無理にどうだというような作り方はしてない」

**五 嶋** 「うーん、そうですか」

**加 藤** 「私は前半の8番、後半の14、15番ホールが特に印象に残りました」

**五 嶋** 「ほうほう」

**加 藤** 「8番のパー4はまず、ティインググラウンドに立った時のロケーションビューが美しい。直線的なのに、落下地点の狙いがむつかしい。美しいのに、実際は実に戦略的です。また、セカンド地点は打上げで、つま先あがり度で難度の高いショットが要求されます」

**加 藤** 「また、14番のパー5は、普通は森林が向こうへ広がっていくんですがここは中へ入り込んできて、借景とバランスが合っている。ロケーションビューに特長のある珍しいホールです。いわば、足首は普通細い方がいいですけど、太くて、ももぐらいの足首で、でもそれがぐうっとすぼまっていくので借景のビューが素晴らしい。しかも、狭そうに見えて広い。そういうデザインには脅かしといて楽にさせるか、楽だと思わせといて難しくするか、どちらかのパターンがあるんですが、ここは前者で、実は安定してるんです」

**五 嶋** 「なるほど、そうですか」

**加 藤** 「一番好きなのは15番のパー3。谷間の中にぼつんとある」



大川「五嶋さんがホールインワンしたところ」

五嶋「あはは」

加藤「距離も150～160と適当ですし、あのホールだけ贅沢に谷間を使って三日月型のバンカーをシンプルにひとつ。とっても特長のあつるホールだと思うんです。美しいホールというのは横の幅よりも縦、絵でいうと縦型額縁の中に収まる作り方が玄人に好まれるんです」（注 表紙の写真が15番ホール）

五嶋「へーっ」

加藤「コースのメモラビリティーというのはそういうものの繰り返しで作られていますから、バンカーにしてもはじめのうちはお皿みたいなバンカーで、私もあのタイプが多いんですが、ちゃんとあるべきところに来ると深いバンカーがあったり、アクセントの強いものがあったりと、それがバランスを崩さずホールに合ってるんですね。プロの設計家よりうまい」

大川「いやいや、これは」

加藤「僕はこういうことはまず言わないんです。距離もあの時代に7200ヤードで作るというのもすごいし、もっとすごいのは2グリーン全盛の時代にシングルグリーンを作っている。これは相当の見識がないとできないことです。外国をたくさん回ってこられた効果が出ています」

五嶋「ご存知と思いますが、大川会長は日本アマのチャンピオンで世界シニアアマも取られた。それも、関西では有名なロングヒッターなんですね。7200ヤードは僕らには手が出ない。長過ぎませんか？」

加藤「いやいや今日（こんにち）にぴったりなんじゃないですか。こんなにボールが飛ぶ時代が来るのを見通しておられた。慧眼です。今はどこも延ばすのに一所懸命やっているけどこのコースでは何もやる必要がない」

五嶋「そうですね」

加藤「それとね、元々の地形だったんじゃないかなと思わせるぐらいに銜わずに作ってるんですよ。私は専門家だから相当の土を動かしているのが分かります。うかがったら200万立方メートルばかり動かしている」

大川「もっといっている」



加藤「そうですね。200万というのは日本では平均より遙かに多いんですよ。大変な手間をかけて、上手にゆったりとした、まず、ボールがとんでもないところへ飛んでいかない、流れのいいプレーのしやすいコースを作ろうというポリシーがあつて金をかけられたんだと思うんですよ。ひとつのどういうコースにしたいという色を決めて、それに合う金を投じて作り、樹木を植えてまた自然にかえしている」

五嶋「はい」

加藤「この谷が30メートル埋まったとか、山が20メートル削られたとか、現在では皆さんには分からないと思うんですが。デザイナーの評価で大事なのは自分のやりたいものを作るんじゃなくてプレーする人に楽しんでもらうこと。どこかのホールを真似したのは日本にはたくさんあるんですが、それはすぐ分かっちゃう。ところが精神が決まっているそのカラーの濃淡で演出されているから落ち着いて見える。なかなかのもんだと僕は思います」

五嶋「ありがとうございます」

## エピソードを組み立てて会報に

五嶋「田野辺さんいかがですか？」

田野辺「うーむ、私はあの加藤さんみたいに設計の専門家じゃないから…。たとえば9番はホールとしては平凡だが、背景の高架水槽を南欧風というかアルプス風というか背景を使って絵にしている。いいですね。11番のグリーンもあそこだけ二つにして、あれはグリーンによって全然違うホールなんですね。飛ぶ人のためのホールと飛ばない人のためのホールを普通はティーで区別するが、11番ではグリーンで区別している。非常に自在な感じを受ける」

五嶋「ほうほう」

田野辺「4番も、ティインググラウンドが右と左にあつてそれぞれグリーンのお眺めが違う。別々の絵を描いている。先ほど大川会長は碁をなさると聞いたが、ひょっとしたら絵を描かれるのかな（笑い）」

五嶋「編集者の立場で見たオリムピックの会報は



いかがですか」

**田野辺**「最初ずいぶんもったいない紙面を作っているなど思いました。一番の宝物である大川さんを使わなさすぎる。会長自身が出たがらないということですが、出した方がいい。クラブの歴史というのはメンバーにいろいろな人がいて、いろいろなエピソードがあって、記録しておくことから成り立っている。会報はその役目をもっている。その意味で第一にあるのが大川会長。ここを作ったあと、どういうゴルフをなさって、どういうメンバーと接触されたか…。そんなよそにないエピソードを組み立てていくと40年、50年経ったときすごくいいクラブ史になるんだと思う」

**五嶋**「なるほどそうですね。会長という宝物。まさにその通りですね。でもこの方はいくら言っても遠慮して書いてくれないんです。古武土的なところがありましてね。酒飲んだときはそういうポリシーみたいなものをお話になりますが…。ただ、もうちょっと、会報で出していけば大川ファンも増えるでしょうし、オリンピックの好きな人も増えると思います」

**田野辺**「両方、必要なんじゃないでしょうか。そういう奥ゆかしい部分も。花王の会長さんが、昔はいいものを作れば口伝えに売れた、今はいいものを作ったら、それを宣伝する義務がある、と書いておられるのを読んだことがあります。宣伝する必要もある」

**五嶋**「はい、そうですね」

**田野辺**「どこかの会報を読んでいて非常に感心したのは90何歳と80何歳かのご夫婦がずっとゴルフなさっていたが、ご主人の方はゴルフができない体になった。だから、今度は孫とやるんだというような話を書いておられた。これは素晴らしい話です。ところが、今の会報には自分のところの宣伝ばかりですね。PR誌になっている。そうじゃない話にいいのがある。武蔵カントリーの会報を読んでましたら豊岡コースの17番か何かのパー3で右のバンカーにつかまり、後ろへ出したり、グリーンオーバーしたりして31たいたいたという話が出てました。ところが、今そのバンカーは浅くなっていて、間違ってもそんなにはたたかない。だからそんな話があったということを書いておかないと歴史には残らない」

**五嶋**「うんうん」

**田野辺**「戸塚カントリーの会報というのは電通が作っていますからいい会報なんです。3年に1回くらい巻頭記事で現場の座談会をやるんです。コース課とかハウス、食堂、キャディなど。なかなかいいことを言っています」



**五嶋**「現場の人の意見を聞く会ですか？」

**田野辺**「現場によって、見るお客さんは違うんです。どう見られているか反省材料になる。メンバーシップですから良くするも悪くするもメンバーの質ですから」

**川島**「オリンピックでもぜひやってみましょう」

## スコアを追いかけているようでは…

**五嶋**「田野辺さん、最近ゴルフに関する小説のようなものが増えていると思いませんか？ほかのスポーツではあまりないことですね」

**田野辺**「それは、ゴルフというのはゴルフの世界の人しか書けないと言うんじゃないで、どんな分野にいてもゴルフやっていますから、その人の生活の中で見たゴルフというのはいっぱい書ける。ただ、ゴルフ小説というのは僕は読んだことがない。何で読まないのかというと、若いとき、ゴルフ記者になる前に小説書いたり文芸評論書いたりしてきました。そんな体験からみるとゴルフ小説は面白くないんですよ基本的に。こっちがゴルフのことを知りすぎたんですかね」

**五嶋**「はあ、そうですね」

**田野辺**「ゴルフ小説のモチーフは人間の内面の問題ですね。ゴルフを知っている度合いによってそれは違う。小説家が書いたからと言ってうまいものが書けるとも限らない。私は30年ほど前に『小説名勝負物語』という本を書いているんですけど、その時友人の北杜夫からスポーツ小説という分野はないから広げて行けというようなことを言われましたけど、結局1作で終り。出版社とか媒体に意識がないとなかなかできない」

**五嶋**「小説の題材になるほどゴルフというのは、何か心理的に深いものがあるんでしょうか。加藤さんがおっしゃったポリシーみたいなものが」

**加藤**「人によって受け取る範囲が極めて広いですから、面白いんです。スコアばかり追っかけて喜んでる人。やさしいコースに行ってもいいスコア出ても、難しいコースに行っても悪いスコア出ても、そのコースがどうであるかなんて関係なく、昨日いくつで歩いたなんて盛んにスコアのことばかり言

っているような小学生的なものがまだ日本人のペースにあります。追求していくと次第にゴルフの歴史やいろんなものがかかると言うことに到達します。僕の友人もいくつで歩いたなんて喜んで言ってますが、いい年してどうしようもないなあって、僕は言うんです。自分がだめになったから言っている部分もありますけど（笑い）



## 愛情を持って作ったコース

**五嶋**「お二人とも長くゴルフの世界を見られていますが、ゴルフ場の経営などでご意見をいただければ」

**田野辺**「私は経営者が悪いって言う罪状部分はもう出尽くしたと思う。メンバーシップに限って言えば、メンバーのほうを考え方を変えなきゃどうにもならんような気がする」

**五嶋**「ふんふん」

**田野辺**「と言うのは、メンバーシップはそのゴルフ場の7割の財務源をメンバーが支えていくというのが基本だと思うんです。ところが、この間、ある投書に年会費というのは会報を出したり通信費にしたりするものであってそれを5万、7万、12万と上げていくのは何ごとだ、とあったんですが、そういう人がクラブのメンバーになるのは基本的に困るんじゃないかと思う。会員権がまるで借用書のように金の問題だけになってしまっている。クラブは最後はメンバーが支えていくんだというものだという心根がなくてはメンバーシップは成立たない。今はメンバーが変わるときに来ている。現実には16コースぐらいがメンバーの金で再建しています」

**五嶋**「その話で思い出したんですけど、ニューヨークのテロの直後にアメリカに行ってみてね、ニュージャージーのクラブの年会費が60万円で、高いじゃないかと言ったら、当たり前だということですね」

**田野辺**「もっと高いものもあります。年会費というか、かかったものは皆で分担というんでしょう」

**五嶋**「でしょうね、そういう発想が日本人にない

ですね」

**田野辺**「不特定多数から金集めてやっていますから、そういう精神は、育ちにくいですよ」

**五嶋**「『ゴルフィスタ』にも出てました白洲次郎（兵庫県出身、軽井沢ゴルフ倶楽部理事長を務めた）さんの精神でいうと、最近のゴルフ場はそういう批判を受ける人がかなりいると思うんです」

**加藤**「そりゃ、やっぱり金を稼がないとやっていけない。税の問題もあるし、だからどうしてもガサガサしてくる。白洲さんは軽井沢ゴルフ倶楽部の自分の世界を守ろうとされたので、今でも明らかによそのゴルフ倶楽部とは違います」

**五嶋**「僕は白洲さんの話で大川会長を思い出します。メンテナンスにも従業員にもお客さんにも厳しい（笑い）」

**田野辺**「私、大川さんのゴルファーとしてのプレイヤーとしての業績は実際に表に出ているものより大きいと思うんです。中部銀次郎の全盛とぶつかっていなければ、もっと日本のゴルフ史に残っていた」

**五嶋**「会長は、昔のことは忘れたよと言って（笑い）」

**田野辺**「でも、今日は加藤さんとは碁盤も囲まれたし意見もたたかわされた？」

**大川**「考え方が同じなんです。たとえば、服を選ぶにしても色とか清潔感とかその人の精神があると思うんです。コースになるとなおさら。愛情を持って作ったのか商業ベースで作ったのか、ものによっては嫌気がさす。自分の思想だから敢えて申しますが、石ひとつないところへ岩を並べたり、枕木並べて当たったらどこへ飛ぶかわらんようなことをなぜせんならんのかと。プレーヤーの身になって良心的に」

**加藤**「自然の形を大事にされていて、思想を生かすように作って乱れてないんです。乱れてたらケチつけようと思ってたけど見事にバランス取れている。シングルグリーンにしても先見性がある」

**大川**「ほめすぎじゃないですか（笑い）」

**加藤**「いやいや、僕はあまりほめないですよ」

**大川**「囲碁のほうでもいい友達になれそうです（笑い）」

**五嶋**「大川会長の下に集まった僕らは幸せなんですよ」

**田野辺**「幸せなんですよ。それを分かって欲しいです。オリムピックの一番いいところは、ゴルフが流行だから作ったんじゃなく大川清という人の世界を作っているということで、そこがほかとは全然違う。そこをメンバーの人が育てていかないと」

**五嶋**「はい、まったくその通りですね。今日は、本当にありがとうございました」

### 3人の対談はどうして実現したか

知人の紹介で参加するようになった田野辺社長主宰の「名門の会」、その会にも参加され何回かご一緒させていただいた加藤先生。親しく「ゴルフ場設計の考え方、接し方、見方など」、田野辺社長とは「ゴルフ場の歴史、変遷、メンバーシップのあり方、会報誌作成のアドバイス」などをお話しさせていただくようになった。

関西に来られる時はぜひオリムピックにもとお願ひしていた…。今回おいでいただいたツアーの名はなんと「関西の3名門を研修する会（廣野・鳴尾・オリムピック）」。

### 設計者としての共通の目

早朝、東京から伊丹に着かれたご一行、コースに直行。会長が出迎えられる。田野辺社長は二度目ということもあり、和やかなご対面。小雨が降っていることもありレストランでしばし談笑、いよいよラウンド。加藤先生は大川会長と我々とは別に二人で廻られた。早く上がられたお二人はどうされているのだろうか？実のところ、加藤先生の辛口評論と大川会長の設計者としてのプライドとが、ぶつかったりしたらどうしようかと心配していたところ、なんと談話室で囲碁をされているではないか。ホットしたのが本音。



「自然からもらったものは自然に返す」という設計のポリシーがまったく同じだったこともあり、意気投合とのこと。さて、囲碁の勝負は？

### オリムピック=会長 会長は宝物

加藤先生と田野辺社長が口をそろえ以下のことをいわれた

#### Hard……コース

会長は「夢」のある立派なコースをゴルファーなかんずくメンバーに作られたメンバーはそれを知り、誇りに思いさらにまた他のゴルファーにも知らせていかなければならない…と。

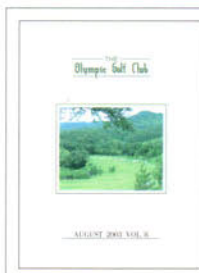
#### Soft……クラブライフ

会長が作られたコース・クラブハウスなどの設備をメンバーがもっと活用し、メンバー同士がもっと交流し、真のクラブライフを作り上げていく必要がある…と  
当日、大きなコンペがあり、お風呂での大声、タオルなどが散乱など見苦しいとの指摘を受けた。

### 加藤俊輔氏の主な設計コース

- 〔設 計〕北海道GC 苫小牧C(北海道) 太平洋クラブ御殿場(静岡)  
太平洋クラブ益子C(栃木) 東条CC(兵庫)  
伊豆GC(静岡) 瀬戸内海GC(岡山)  
〔改 造〕片山津GC(石川) 2004年日本オープン開催のため  
小金井CC(東京) 1グリーンベント化

### ゴルフスタの会報批評



今号を読んで、「ホラ、やれば出来るじゃないか」と思った。  
全ページにメンバーたちのエピソードが満載されている。これがクラブライフである。数年前、この会報を初めて手にしたとき、各ページは、デッドスペースだらけだった。記事も、大上段、正眼に構えすぎていて、誰れに読ませようとするのか、他所行きだった。巻頭の飯田洋三さんの文章は、サマランチ氏とデサントウエアの因縁話でプロ級の冴え。「オリムピック」はサマランチ氏公認の名称だからまさに巻頭にふさわしい。レデイス座談会にも、これだけ多彩なエピソード記憶をもった女性会員を持つクラブは俾せたと感じさせられた。



# 大川 清のひとりごと

## 「人生観と幸福感」



私はゴルフ場オープン以来、改造工事及び植木の剪定、コースのケア等の為、ハウスに泊り込んで仕事をしてきたので、山の自然風景に接する機会が多くなった。都会では気にもせずに暮してきたが、晴れた夜空の星の数の多い事、月が大きく奇麗で間近に見える。天、宇宙の偉大な力と神秘さに少しづつ興味を抱くようになった。世の中の人々は、今年の冬は特に寒いとか、春の来るのが遅いとか、今年の夏の暑さは厳しい等と言っては騒ぐが、毎年の暦を自分なりに比較、検分をしてみると四季の流れは、立春が来て啓蟄、春分、穀雨が過ぎると立夏、芒種、入梅、夏至が過ぎると立秋、白露、秋分、霜降、立冬、大雪、大寒、冬至との順は実に正確に規則正しく順巡ることが判る。タンポポの苗にはタンポポの花が、梅の木には梅の花が、桃の木には桃の花、ツツジには五月、桜にコブシ、あらゆる草木のそれぞれの木にそれぞれの花が咲き実がなり、形も色も少しの間違いも無く、永久に広大無辺で緻密で、微妙で堅固にそのリズムを転回している事に気付いた。ゴルフ場も地球上のほんの一部ではあるが、大自然の法則に逆らわないような管理及びメンテナンスを施し、自然に近い優しい、温かい懐に抱かれた安らぎを感じる雰囲気を出せる良いスポーツクラブを目指し、テニスコートやスイミングプール、地下約1,500mを掘って温泉の露天風呂及びジャグジー



等の設備を整えた。プレイヤーの皆様が、その湯に浸かって「ああこの温泉は素晴らしい」、「ああ疲れが一気に吹き飛ぶよ」、「ああ良い気持ちだ」と喜んで戴ける声を聴く毎に、自分の仕事の大事さと価値観、使命感、責任感を一層強く実感するようになった。これからもっと努力をしなければと思う気持ちになる。

人間は仕事と環境によって、希望も、目的も、人生観も変わっていく事を悟った心境である。人間の幸せとは、必ずしも物質のみでは無い事が感じられた。